

Leaders TOPICS

ドイツ西北端の小さな街「ノルデン」の回想

エネルギー部会長 鈴木勝男



■ 背景

筆者は現役時代に海底ケーブル通信システムの開発に約30年間携わり、100回を超える海外出張の機会があった。その中でも特に印象深かったのが、1991年にイギリス～ドイツ海底ケーブルの敷設と敷設後の特性評価で訪れた、ドイツ西北端の小さな街「ノルデン」での約4週間の滞在である。ノルデンは北ドイツのブレーメンから電車で4～5時間かかる最果ての地であり、事前調査に訪れた同僚は、現地の人から「日本人がここに来たのはあなたが初めて」と言われたそうである。



滞在地・ドイツ西北端「ノルデン」

■ ドイツの通信局にて

海底ケーブル敷設は、洋上の敷設船と陸上の通信局間で試験信号を常時監視しながら昼夜2交代制で約2週間連続して行われた。局内では英語が通じたが街ではほぼ通じず、過去に学んだドイツ語の知識だけが頼りだった。

◆挨拶は「モーイン、モーイン」

初日の朝、奇妙な挨拶を耳にした。職員同志が会うと互いに片手を挙げ笑顔で「モーイン、モーイン」と挨拶していたのである。当初は「モーニング」の変形かと思ったが、昼休みや夕方の退勤時も「モーイン、モーイン」と言っているとのこと。何故か暖かく親しみを感じる挨拶なので、筆者もすぐに使うようになった。

◆装置室は核シェルター

海底ケーブル用伝送装置は地下の装置室に設置されていた。重くて分厚い鉄の扉を2枚開けて入る頑丈な作りの部屋である。何と、装置室全体が核シェルターになっていて、核戦争が起こっても通信が途絶えないよう備えられていたのである。日本では考えられない危機管理に驚かされた。

◆ある土曜日に

職員2人が休日にもかかわらず脚立を持って装置室に現れ、何か作業をしていた。彼らは「長時間のモニタリングは退屈だろう」と気遣い、上の階からテレビのアンテナ線を引き込み、装置室にテレビを設置してくれていたのである。彼ら(顧客)のこのような心遣いは想定外であり感謝・感激だった。

■ 宿泊ホテルのカウンターバー

宿泊先のホテルには小さなカウンターバーがあり、日直の帰りに立ち寄り一杯飲むのが楽しみだった。接客していた若い女性は英語が話せないのので、注文は「アインケーニツヒ ビツテ」などと片言のドイツ語で頼むしかなかった(ケーニツヒはビールの一銘柄)。北ドイツのピルスナーはその銘柄専用のグラスで提供され、グラスの形状によりきめ細かな泡立ちや香り、旨味を最大限に引き出すそうである。またグラスには300mlの位置に目印線があり、ビールの量が目印線に達するまで何度も泡切りをするため、1杯出てくるまで10分ほどかかった。ビールにも妥協を許さないドイツ人のこだわりがあった。

■ 中華料理店にて

滞在中、ホテル近くの中華料理店にも足を運んだ。食事中、近くの席にいた大柄で恰幅のよい老人から声をかけられた。「チャイニーズ？」と聞かれたので首を振って「ジャパニーズ」と応えたら、「オオ、ヤーパン！」と感激したように近寄ってきて、肩越しに抱きかかえられた。言葉が通じないので未確認だが、この親近感先の大戦中の同盟国ならではのものではないかと、ふと思った。

■ 最後に

帰国直前には、通信局の職員が自宅に招いて送別会を開いてくれた。その他にも彼らには公私に渡り、数多く世話になった。彼らのフレンドリーな振る舞いは顧客とベンダーの関係を超えていたが、ドイツ人の気質なのか、彼らの人間性なのか……今でも心に刻まれている。



滞りホテル現在も存在

※本稿は文字数の調整等にMicrosoft AI(Copilot)を活用